No. １１５

発行日
２０２０．１２．１３

発行：ばとこいあ神戸事務局

ばとこいあ通信

SONG FOR THE PEOPLE BY THE PEOPLE

編集　千松　幸夫

事務局：　尼崎市築地５丁目３－１２　千松　宛
Tel：090-8216-1243

E-mail：batokoia-kobe@imail.plala.or.jp
ホームページ：http://www9.plala.or.jp/batokoia/

国が個人情報を一元管理するな！

菅がその本質を露わにしだした。

まずは「学術会議」の任命の一部を拒否した。その理由も明らかにせずに、抽象的な言説のみでその正当性を主張しだした。アベボンはその「ボンボン」的本質で何事もその理由を明らかにせずに、全てを国家の管理下に置こうとしだした。自由経済を御旗にしながら、その恩恵を裕福な世代と資本家にのみに限定した階級に限定してきた。菅はそれを大々的に日本を階級社会に堕する本性を露わにしだした。

菅にはアベボンのような「ボンボン」的な側面はない。「阿部政治」を継承すると言って、所謂「苦労人」の本性で「阿部政治」をさらに推し進めて「階級社会」を固定化する姿勢を明らかにしだした。

それが「コロナ過」で明らかになってきた。コロナの終息と経済の活性化を同時に行う政策が取られてきた。が収束に向けた政策費は限られていて、医療機関、介護・福祉機関への援助は雀の涙で、中小企業や個人経営への援助も限られていて、どっちつかずの政策しか動き出していない。一度国民生活の最低限の保証を担保してコロナ過の終息へ向かわなければいつまでも COVID-19 に怯える生活がいつまでも続くことになる。それが訳の分からん日本政府の「GO TO 」キャンペーンによって更なる感染の波が今押し寄せている。むやみに恐れることはないのだろうけど「自粛警察」みたいに差別を助長することなく、地道な自己防衛策と世界を挙げた対策で乗り越えていかな方法は無いんじゃないだろうか。ふ

自公維の中で「立憲民主主義」を守ろうとする奴らはいない。「野党」も「国会議員」の特権を守ろうとする輩ばかりや。最も経費が削減できる国会議員の歳費を削減し、彼らの職務を厳密に規定しなければいけない。国民が希望すればいつでも国会を開催出来るようにする必要がある。憲法５３条の「内閣は、国会の臨時会の召集を決定することができる。いづれかの議院の総議員の四分の一以上の要求があれば、内閣は、その召集を決定しなければならない。」に自民党は一貫して「馬耳東風」の態度を貫いてきた。「憲法改正」を叫ぶなら国会を始めとして地方議会でも今の条文の不備を改めることや、国会議員の歳費・政治活動費(地方議会も含めて)の明朗化を図ることから始めないといかんやろう。

さらに「マイナンバーカード」(これ自体にも問題が山積み)に運転免許証や健康保険証を組み込むことが画策されている。そんなに国民一人一人の行動を監視しないと不安なら、もっと国民に歓迎される(金持ちだけが称賛するような物じゃなく)政策をどんどん実行すればいいのだ。

２０２０年１０月１１日（日）

神戸学生青年センター・スタジオ

参加者 11 名（表現者 9 組 9 名）

９月２６日夕方に突然。「脳梗塞」に見舞われて首から下の左半身がマヒし、救急搬送され緊急入院を余儀なくされた。その顛末は別稿に譲るが、何とか早期の治療を受けられてマヒ等が一切残らず１１日で退院できたが、翌日夜から母をショートステイから呼び戻して介護生活を再開させた。車の運転を禁止されたので、第１１６回は欠席を余儀なくされた。２０１７年１２月の忘年会と２０１８年８月に続き３回目の欠席となってしまった。矢谷君に迷惑をかけてしまったが、今後は皆に色々と欠席しなければいけない事情が発生するのであろう。

今回は姫路から小野純一さん、京都からあべひろえさんが、そして徳之島出身の宮内俊郎さんが初めて参加して下さった。

本当は行きたかったけど、まだ無理できるような体調ではなかったし、これ以上皆に迷惑をかけられないので「自粛」せざるを得なかった。

写真は矢谷君が撮影してくれました。

中山　けんいちさん

藤原　洋介さん

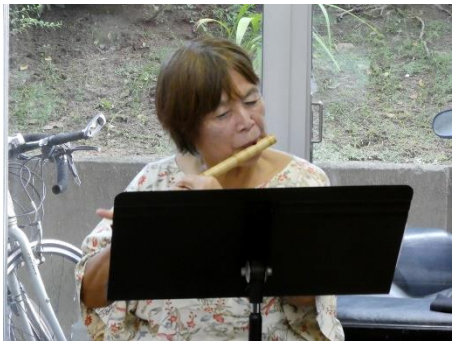
宮内　俊郎さん

矢谷　トモヨシさん

あべ　ひろえさん

小野　純一さん

岸田　善光さん



土山　恵子さん

永井　ますみさん

Photo by Tomoyoshi Yatani

沖永良部島の伝説

岸田　善光さんより

タ シ キ 又 鬼 騒 動 記

後　編

「どうじゃ鬼八元の体に戻ったか？さすが鬼の体力だ。ところで鬼八お前は今日からは鬼六と名乗るのだ。儂との勝負に負けたお前に儂と同じ八を名乗らせる訳にはいかん。お前は今日から鬼六じゃ分かったな！」「孫八様の言い分、最もでございまする。同じ八は名乗れません。儂は今日から鬼六と名を改めまする。」二人は目を合わせると笑いあった。

その見た目の異様さと異形さに領民たちに初めの頃は恐れられていた鬼六であったが優しい性分と顔に似合わぬひょうきんさで、すぐに村人たちと仲良くなった。何しろ人の数十倍もの力持ちだから「鬼六どん。鬼六どん。この石を運んでくれ」だの「この松の木の根っこを引き抜いてくれ」だの「この巨石を転がしてくれ」だのと鬼六に、あっちこっちから声がかかる。鬼六は呼ばれるたびに「へいへい」と素っ頓狂な返事をして村人を笑わせた。特に子供たちは良くなついた。山のような背中の毛にぶら下がったり、肩車をしてもらったり、角をつかんで逆立ちしたりして大喜びだ。子供たちが鬼六と遊ぶから親たちの仕事もはかどった。鬼六は昼は灌漑工事を手伝ったり子供たちと遊んだり、夜になると孫八と武芸の稽古をした。最初は孫八と二人だけの稽古だったが、次第に家臣たちも一緒に稽古をするようになりだした。ここに孫八軍団最強の兵が作られつつあった。

グラルのシマの真ん中を速水川と言う川が流れていた。この川に橋を架けようとするが何としても上手くいかなかった。いつも完成間際になると急に大水が出て橋が流されてしまうのだ。天気だった空が急に荒れだし静かだった川がまたたく間に氾濫した。これには孫八も琉球から来た橋掛けの名人と言われた慶良間も困り果ててしまった。「これはどうした事よのう。慶良間殿何か良い手立てはござらぬか？」「もしかして竜神様の怒りをかったので有りましょうか？」「竜神様だと？竜神などと言う者は迷信では無いのか？」「いえ決して迷信などでは有りませぬ。私も昔に村の長老から聞いた話ではありますが、今とそっくりなことがあったの由。」「どうして竜神を収めて橋を架けたのだ？まさか人柱などと言うのでは有るまいな！」孫八。「そのまさかでございまする。人柱を竜神様が気に要らぬ場合二人、三人と立てる場合もあると聞いております。」「人身御供などどうして選べば良いのだ」孫八は居室に籠ると２，３日出て来なかった。

村人たちの間にも竜神様の怒りを解くため人身御供として人柱を差し出さねばならぬようじゃとの噂が流れ始めた。「恐ろしい事じゃ人柱などと」「儂は嫌じゃ行きとうは無いわ」「儂も嫌じゃ竜に喰われるなどと恐ろしいわ」「でも誰かが行かねばならぬのじゃろう」「親方様はどうして決めるのであろうかのう」「恐ろしいが儂は親方様が行けと命じれば喜んで行くぞ。」「儂もじゃ親方様のお役に立てれば喜んで行くぞ。」と言うような声も聞こえた。

「親方様宜しいですか？喜八でございます。」「喜八か？こんな遅い時分にどうしたのだ何か困ったことでも起きたか？」「親方様、竜神様に立てる人柱ですがうちの娘のお光をどうか立ててやってください。お光にはよく言い聞かせてあります。お光も親方様のためなら喜んで竜神様の下に行くと言っております。親方様もご存じの通り儂のところは貧乏人の子沢山の水飲み百姓。今のままじゃ暮らしは立ち行きません。」

「お光は確か８歳じゃったな？可愛い盛りでは無いか？喜八の所はお爺とお婆が相次いで病に伏し、その薬代のために田畑を売ったとの事じゃったな。」「へい。あの年は稲がみんな害虫にやられるわ、台風は来るわで、台風に稲が皆やられた衝撃でお爺は倒れるわお婆は倒れるわで大変な年でございました。ですが倒れた親を見捨てる訳には行きません。親方様どうかお光のことお願いします。」喜八は涙を拭きながら親方に訴えた。次の夜今度は与作が訪ねてきた。「親方様橋を掛けるには竜神様に人柱が必要だと聞いております。そのお役目どうか儂にやらせて下さい。」「何となお前が進んで人柱になると言うのか？何か訳でもあるのか？」「儂の兄様は良く働く真面目な男でございます。また米作りにも大変に研究熱心で兄様の作る米はいつも島で一番の出来です。ですが小作で自分の田畑がないため３０過ぎたのに未だに嫁さんの成り手が居りません。儂が人柱となり、きっと竜神様を鎮めて見せます。だから親方様、親方様、誠に申し上げにくい事ではありますが橋が上手く架かりましたら、竜神様を鎮める事が出来ましたら、どうか兄様を地主にしてやってください」与作は地に腹が付くほど頭を下げた。「兄思いの奴よのう。」孫八は呟いた。

幾日かして鬼六が訪ねてきた。「孫八殿、竜神様の人柱には儂がなる。今まで何百年の間村人を襲い散々人肉を食らってきた儂じゃ。儂の肉なら竜神様も満足だろう。文句はあるまい。」鬼六は言った。「鬼六何でお前が行く必要がある。これは人間界の問題だ。」と孫八が言うと「鬼の目にも涙と言う奴よ」と笑いながら鬼六は言った。「鬼も冗談を言うのか？」孫八が驚きながらも笑いながら答えた。「儂はここに来て優しい心を知った。お光ちゃんや与作、順三等みたいな若者を殺す訳にはいかん。あ奴らはこれから役に立つ男達だ。だから儂が人身御供となり竜神様をきっと鎮めて見せる。今までの罪滅ぼしじゃ。」孫八は鬼六の決心の固さを知ると何も言わなかった。しばらく沈黙が続き孫八が言った。「それはそれとして鬼六、儂と一手合わせようじゃ無いか！お主随分と強くなったであろう？」二人は木刀を持ち構えた。以前の鬼六では無かった。力任せに木刀を振り回すような事はしない。腕の長さを活かして下段に構えどこから木刀がくるか分からないようにして孫八をじりじりと追い詰める。孫八めがけて木刀をすくい上げる。それを孫八は紙一重でかわし鬼六に木刀を打ち下ろす。それを鬼六がかわし、と言う様なことが何度も続く。「腕を上げたでは無いか？」「これも孫八様との夜毎々の稽古のおかげでございます。」鬼六は今度は木刀を上段に構え孫八めがけて打ち込んだ。木刀が孫八を捕らえたと思ったその瞬間鬼六の目の前から孫八の姿が消えた。鬼六は「どこに？」と辺りを見渡そうとしたその時鬼六の首に後ろから木刀が当たって居るのが分かった。「参りました。まだまだ親方様には及びません。」鬼六は深く頭を下げた。孫八は酒の準備をさせ鬼六と夜遅くまで飲んだ。

幾度目かの橋が完成した。岸の麓に杭を打ち付けそこに鬼六を縛り付けた。村人は遠巻きにして見ている。「鬼六すまねー」「お前の恩は忘れねーからな」４口々に叫ぶ。子供たちは鬼六にまとわりつき離れようとしない。「鬼六死んじゃやだよう」「鬼六を縛っている綱外してよ。」と子供たちが泣き叫ぶ。「人柱なんか庄屋の権三様がなれば良いんだよ。普段から威張ってばかりでがめついんだから。」「そうだそうだ！」の声が大合唱した。

権三は顔を真っ赤にして「なんてことを言うんだ恐ろしい。」と木の陰に隠れた。中には「俺が竜神様とやらをやっつけてやる！」と刀に見立てた棒切れを振り回す７，８歳ばかりの子供もいた。

それまで明るかった空が急に暗くなり激しい雨が降り出した。穏やかだった川の流れかも激流となりうねりを伴って一気に押し寄せて来る。西の空から明るい光に包まれてこちらへ向かって来る竜の姿が見えた。さっきの威勢はどこへやら子供たちは「怖いよう！」と一目散に自分の母親の元にかけて行きその後ろで手をつなぎ隠れた。竜神様が橋の上を飛んで行った時にはもうそこには鬼六の姿は無かった。川の流れは元に戻り、空も明るくなりいつもと変わりない。

それから１年程して工事は終わった。城の周りは見渡す限りの田畑となった。喜八も与作も順三も与作の兄の彦一も「心優しき者たち」として孫八より田畑をそれぞれ２町歩ずつ授けられた。鬼六が人身御供となり人柱となって架けられた橋はどんな激流が来ても、どんなに水嵩が増えても二度と流されることはなかった。

孫八が家臣、領民たちを集め言った。「ここにかって暴れ馬と呼ばれた速水川の面影はない。この川もグラルのシマも生まれ変わったのだ。これからこの川はグラルのシマに豊かな稔をもたらせてくれるのだ。今日からこの川を瑞穂川と呼びこの橋を瑞穂橋と呼ぶことにする。」

「殿おめでとうござりまする。」

「瑞穂橋、良い名前でにございまする。」

「これも鬼六が人身御供となり人柱にたったお陰でございまするな。」

「全く鬼六のお陰じゃ。」

村人たちは祠に鬼六の像を祀り感謝の念をいつまでも忘れなかった。

あれから約６００年、後蘭孫八が灌漑工事をした後蘭の田んぼは、「広々とした後蘭の田んぼ」として教科書で紹介され小学校の教諭をしておられた伊勢達一先生は、今田んぼを見て

「稲穂豊かに垂れ下がる後蘭盆地に朝が来て呼び合う子らの声高く明るい後蘭築くのだ」と後蘭子供会のために歌を作られた。鬼六が身代わりとなって助けた子供たちの子孫は毎日元気に走り回り遊んでいる。

照る月を眺めながら、たまには孫八様と鬼六どんのことを思い浮かべながら、親子で話してみませんか？子供たちも喜びますよ、きっと。

お終い

『ばとこいあ神戸』こもごも

『ばとこいあ神戸』の歴史　その２８

千松　幸夫

【第２部】第Ⅱ期『ばとこいあ神戸』

【第２０章】第４７回　～　第４９回

第４７回は２００８年１０月１１日（土）。場所は神戸学生青年センター・スタジオ。参加者９名（表現者８組８名）。晴れ。

最近、小林多喜二の「蟹工船」がブームとなっているらしい。
私もかなり昔、学生だった頃、むさぼるように読んだことを思い出した、そしてその文章から強烈な臭いも感じた記憶が懐かしい。
私がプロレタリアート文学を知る前、文学の世界では「労働者文学」と言われる静かなブームがあったらしいことを最近知った。
労働者文学とは、共産主義思想などは前面に出ることもなく、ただ純粋に労働者がその日常の生活や思い、家族や恋人との愛などを小説や詩にし、本として出版したものだ。その後社会の変化に伴って労働者文学も思想性の込められたプロレタリアート文学へと移行していく。
フォークソングの世界でも最初は労働者や学生たちが、それまでの労働組合の労働歌や共産党の青年組織民青の「うたごえ」に対し、アメリカのフォークソングをコピーし反戦フォークを日本語で歌い始め、既成の音楽文化のカウンターカルチャーとした。
私たちの「ばとこいあ神戸」では、プロといわれる専門家の人たちの参加はなるべく遠慮してもらっています。そうすることで非専門家（労働者）たちによる自由な表現空間を作り続けているのです。
それが隆二郎や千松氏が常々言い続けている「ばとこいあ神戸」の基本理念なのです。そして私たちの「ばとこいあ神戸」は時代が変化してもこの姿勢を変えることはありませんし、この「ばとこいあ神戸」はブームになることもないでしょう。
そういう意味では私たちの「ばとこいあ神戸」は労働者文化とも言えるのではないでしょうか。

（「ばとこいあ通信」第４５号より）

☜　中嶋　初恵さん

土山　恵子さん　☞

☜　中野　誠三さん

小林　隆二郎　☞

☜　福岡　キコさん

渡辺　博昭さん　☞

☜　伊藤　敦さん

土山　恵子さん　☞

矢谷　トモヨシさん　☞

☜　矢谷　トモヨシさん

第４８回は２００８年１２月１３日（土）。場所は神戸学生青年センター・スタジオ。参加者１６名（表現者１０組１３名）。晴れのち曇り。

１２月に台湾の台北市と高雄市で開催された、国際人権会議に招待された隆二郎と神田さんの二人。その行程や内容に関しての報告は別に記載されているので参照して頂きたいのですが、ここでは台北市の自由広場でのコンサートで歌う二人に対しての台湾警察の威嚇の実態を報告しよう。
昨年、政権が民進党から国民党に変わり、長く続いた、あの白色テロルの恐怖が再び忍び寄るのではと危惧を抱いていたのは昨年の６月、和平音楽祭に参加し、自由になった台湾の現状を見、肌で感じた時だ。

３１年前の戒厳令下の台湾を体験し、現在の自由な台湾とのギャップの大きさに戸惑い、今浦島太郎のようで不安の連続だった。また若い人たちの奔放さにも戸惑った。それと同時に、権力を握った国民党が台湾の多くの人たちに支持され、本当に変わったとはとても信じられなかった。
そして。再び１２月に訪台した。迎えてくれたリン・マイルス氏から国民党の不当な法施行、言論の自由への侵害、合法的な集会への警察の暴力的な弾圧、等々の現状が話された。

そしてそれへの抗議を込め、立ち上がったのが学生たちで結成された「野草苺運動」だ。

運動はまたたく間に台湾全土に広がった。それに恐れをなした国民党政権は警察権力を投入し弾圧を加え始めた。台北では自由広場を中心拠点として「野草苺運動」を展開させていたが近日中に大弾圧が加えられるという噂が広がり、それを心配したリン・マイルス氏は人権会議に招待されたのを活用し、私に「彼らを励ます意味も込め自由広場で歌って欲しい」と事前に要望され、私はその場で快諾し、同行する神田君にも了解をえた。

台北についた２月９日の夜、自由広場に作られたステージの前には３００人くらいの学生や市民が集まっていた。リン・マイルス氏のアピールメッセージと私と神田君が台湾を訪ねたいきさつを話され、私たちのステージが始まった。

歌い始めてすぐに、参加している人たちの後ろで、多くの私服警察官らしき男たちが、それぞれ手にデジカメを持ち、参加者を映しているのを見つけた。　その後も、私や神田君にも遠慮なしに、威圧的に写真を撮り続けていた。そして私の最後の歌「LOVE・PEACE&FREEDOM」を参加者に「みんなで立って、隣の人と肩を組み一緒に歌いましょう」と呼びかけ、参加したすべての人たちもそれに答えてくれ、大きなシングアウトの輪と化したのだった。

歌い終わってステージを降りた私に、主催者の学生が「警察官があなたのことを執拗に『彼は何者だ、何処から、何のために来た』と聞きまわっていましたよ」と話してくれた。その時私の老いた身体に、４０年以上も前の学園闘争時を思い起こさせ、煮えたぎるような熱い血が駆け巡るのを感じ、私にもまだ不当な権力に対し体を張る気力と体力があることを再確認できた。

神田君もまた「１９７０年代を思い出した」と語り、警察官たちを睨みつけていた。

私たちの次のステージでは、地元のロックバンドが演奏を始め、台湾に亡命を求めている３０人くらいのチベットの人たちの代表をステージに呼び、アピールの場を提供した。これにも警察は警戒を強め、その人数をさらに増やしていた。結局その時は何もなく終わったのだが。その２日後、自由広場の「野草苺運動」は多くの逮捕者を出す強硬な弾圧を受け、自由広場を追放されてしまった。

それは国民党が多くを占める台湾人権協会が主催した「Asia Democracy and Human Rights Award 2008」を開催し、国民党の馬総統が「台湾の自由宣言」を声高に言った、その舌の根も乾かぬ間の出来事だった。

私たちは今、近隣の国々での表現や行動への弾圧を無視することなく出来るだけ知ることで、私たちも含め「表現や行動の自由」を求め続ける人の輪を広げ、共につかみとり続けて行きましょう。

（「ぱとこいあ通信」第４６号より）

この項　(Photo by S.Kanda & Ryu.Kobayashi)

☜　藤原　正志さん

中嶋　初恵さん　☞

☜　中嶋　初恵さん

福岡　キコさん

福岡　キコさん　☞

☜　BBB featuring
ChizuRu

村上　二郎さん　☞

☜　岩城　千鶴さん

小林　隆二郎　☞

神田　修作さん

☜　小林　隆二郎

中野　誠三さん　☞

☜　綾城　滋さん　☞

☜　綾城　一さん　☞

☜　澄田　好信さん

永井　ますみさん　☞

☜　神田　修作さん

風来　☞

☜　矢谷　トモヨシさん

第４９回は２００９年２月１４日（土）。場所は神戸学生青年センター・スタジオ。参加者９名（表現者６組７名）。曇り時々晴れ。

わが国においても、かって自由にものが言えなかったり、詩や歌、小説などが国家権力の検閲を受けたり、表現そのものが禁止された時代があった。それは形ややり方を変えて今でも行われているのだ。そう言ったら「まさか？」と思う人が大多数を占めると思います。この表紙記事で何度も書きましたが、恐らく自身が体験しなければ理解できないと思いますし、この事は決して表立っては出てこないような仕組みになっています。たとえば、天皇制を批判した歌や詩を多くの人の前で表現したら、必ず「この人物は反天皇制の思想の持ち主」と決め付けられ、公安警察にマークされ、もしその人が住む地域に皇室関係者が訪問するとしたら、必ず危険人物としてマークされるでしょう。小林隆二郎も宮崎県の学園祭で歌った時、ステージで「制度としての天皇制の問題点を指摘」しただけで、最近まで公安のマークが続いた。彼は何の組織や団体にも属さない一人のフォークソングシンガーなのにだ。つまり決して口にしてはならない事を、国家が決めていて、それに逆らう者に対しては弾圧を加えることが現在でも明確にあるのです。そうすることで表現者は、それに触れることは無くなり、闇に葬られる。ここでも自由が一つ奪われているのです。これに似たことは数多くあるはずで、知らないうちに多くの表現の自由が奪われていることに気が付くべきでしょう。

更には自主規制という方法で、自らが知らないうちに自由な表現に制限を加えてしまっているのも現実です。

誰もが良いことは「良い」、悪いことは「悪い」、おかしいことは「おかしい」と言え、表現できる世でなければ自由な国とは言えない。

国家はなぜ、表現の自由を恐れるのだろうか？そんな国家は必ず国民に知られては都合が悪いことを隠蔽し続け、巧みに国民を都合良くコントロールしようと考えているからでしょう。そんな国家の思いに反して、何のメデイアも持たない国民が疑問を抱き、詩や歌や講演で表現し、それが人々の間に広がる事に国家体制は嫌悪と恐怖を抱くことは、歴史的に明白だ。その国家が独裁であるならばあるほど強権を発動し弾圧を加えつづけるでしょう。

そうならないためにも、私たちは常に自主規制をしないで、堂々と表現しつづけ、自由と民主主義を堅持しなければならないでしょう。その重要な一歩が、私たち自身が表現し続けていくことなのです。

「ばとこいあ神戸」は小さい空間だけれど「表現の自由を求める」思いだけは姑息な国家体制と対等に渡り合える重要かつ大切な場なのです。

さあ、自由にのびのびと「ばとこいあ神戸」を楽しむことで、私たちが私たちであることを宣言しましょう。

（「ばとこいあ通信」第４７号より）

☜　中嶋　初恵さん

保多留　☞

☜　福岡　キコさん

☜　小林隆二郎　☞

村上　二郎さん　☞

☜　BBB featuring ChizuRu

☜　村上　二郎さん

岩城　千鶴さん　☞

☜　中野　誠三さん

永井　ますみさん　☞

Photo by Yukio Senmatsu

隆二郎　歌集　－１７

アルバム「人はみな旅人」に収められている。
このアルバムの録音の時にしか聞いたことはない。ま、この頃から世間の人々の問題意識の無さに嫌気がさしていたんだろう。

唄を忘れたカナリア

詞・曲　りゅうじろう

１）　唄を忘れた　カナリアが
どこかの街に　すてられた
生まれてすぐに　カゴの鳥
なんで自分の　唄を知る
だけど唄わにぁ　すてられる
そんなもんかよ　人生は

２）　唄を忘れた　カナリアが
どこかの山に　すてられる
生きるためには　歌まねを
したけどやっぱりカナリアさ
よそ見してたら　鉄砲で
撃ち殺されて　しまったぜ

３）　唄を忘れた　カナリアが
どこかの星に　すてられた
そこに休める　場所はない
追われ追われて行きつく先は
世間知らずの　たどる道
死への旅路の　急な坂

４）　唄を忘れた　カナリアは
カゴの鳥には　もどれねえ
ましてやカラスやとんびにも
なれねえもんかよ弱すぎらあ
うらみに満ちた　お前の目は
誰をうらんで　いるのやら

５）　唄を忘れた　カナリアよ
産まれて来るのが
早すぎたのか
それとももっと　あとの世に
静かな森で　産まれた方が
よかったのか　悪かったのか
わかるもんかよこの俺にやあ

６）　唄を忘れた　カナリアが
今日もどこかに　すてられる
背戸のお山に　すてましょか
いえいえ　それはかわいそう
あたりまえかよ　こんな事は
横目でみながら　知らん顔

唄を忘れたカナリヤ　　詩・曲　りゅうじろう

1) 唄を忘れたカナリヤが　G　Em
どこかの街にすてられた　G　Em
生まれてすぐにカゴの鳥　C　Em
なんで自分の唄を知ろ　B7　Em
だけど唄わにゃすてられる　G　Em
そんなもんかよ人生は.　B7　Em

2). 唄を忘れたカナリヤが
どこかの山にすてられ
生きるためには唄まねを
したけどやっぱりカナリヤさ
よもやくてたら鉄砲で
撃ち殺されこしまったぜ

3) 唄を忘れたカナリヤが
どこかの星にすてられた
そこに休める場所はない
追われ追われて行った先は
世間しらずのたどる道
ちくしょうの夜路の急な坂.

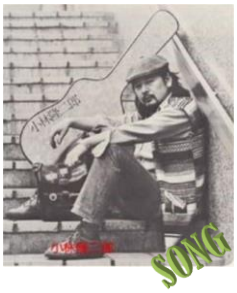
4) 唄を忘れたカナリヤは
かごの鳥にはもどれぬと
あしたやカラスやとんびにも
なれるもんかよるちすぎらあ
うらみに満ちたお前の目は
誰をうらんでいるのやら

5) 唄を忘れたカナリヤよ
産まれて来るのが早すぎたのか
それともっと遠の世に
静かな森で生まれたえが
よかったのか悪かったのか
わかるもんかよこの俺にゃあ.

6) 唄を忘れたカナリヤが
今日もどこかにすてられる
浅草のお山にすてましょか
いえいえそれはかわいそう
あたりまえかよこんな星は
地獄こうなかさ知らん顔.

小林隆二郎　　Memorial

『旅の終りに』



CD とリーフレット

CD

Ｄｉｓｋ　１	1999 年まで
Ｄｉｓｋ　２	風来とのコラボ集 （風来ライブとリハーサルから）
Ｄｉｓｋ　３	日本国内ライブから
Ｄｉｓｋ　４	臺灣から
Ｄｉｓｋ　５	『ばとこいあ神戸』から　Ⅰ
Ｄｉｓｋ　６	『ばとこいあ神戸』から　Ⅱ
Ｄｉｓｋ　７ (Bonus Disk)	『ばとこいあ神戸』からの語り集

プラス２００６年から２０１４年までの映像を収めたＤＶＤを２枚つけます。
データディスクのため、パソコンで再生して下さい。

カンパ　１セット　￥３,０００　（送料　￥１,０００）

リーフレット（2015 年改訂版）

全１３６ページ

１９９９年秋の「新訂版」に２０００年以降の唄の詩や．『ばとこいあ　通信』から抜粋したエッセイを付けました。

カンパ　１冊　￥１,０００　（送料　￥５００）

CD とリーフレット一緒の場合、送料は￥１,０００です。

『人はみな旅人』　ＣＤ

1 枚 500 円

原稿を下さい。

次の『ばとこいあ神戸』の開催の前月末までに事務局へ届けてください。僕の主張だけしか無くなってしまいますので・・・。

ほんまに言いたいこと無い・・・？

よろしくね！

編　集　後　記

大事な事は何も話さず、官僚どもには「信賞必罰」で臨み、自党代議士には勝手にさせておいてすべてを秘密にする。国民には「自助」と「共助」だけを求めて「公助」の手を指し伸ばさない。前政権の責任には目をつぶり何も語らない。日本国憲法第１１条「国民は、すべての基本的人権の享有を妨げられない。この憲法が国民に保障する基本的人権は、侵すことのできない永久の権利として、現在及び将来の国民に与へられる。」同２１条「集会、結社及び言論、出版その他一切の表現の自由は、これを保障する。」同第２１条２項「検閲は、これをしてはならない。通信の秘密は、これを侵してはならない。」同第２５条「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。」同２５条２項「国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。」をすべて無視し、その上さらに憲法改悪を叫ぶ。彼らが求めるものより前にやらなあかんことが沢山ある。国会議員、内閣構成員、国家公務員等の職務の内容と責任を細かく憲法ないし法律でしっかりと決めることだ。更に議員や公務員のリコール制を明確に定めることだ。議員の収支を１円単位で領収書添付で開示する、選挙時も当落関わらず同様だ。それらをやってから憲法改正をやれ。

今コロナ過を世界の人々と手をつないで乗り切らなければ経済の回復はありえない。今やみくもに経済の回復を叫んでも無意味だ。GO TO トラベルでの人間の移動がコロナのまん延を招いているのに何もしないで国会を閉会した。アベボン以上に何もせん奴に総理を任せておくわけにはいかないんや。

このままじゃ近いうちに「日本」という国は無くなってしまうよ・・・。

（千）